［制作記録］

# インタラクティブインスタレーションの制作３

伊　藤　英　高

2006年に制作した作品「経箱」を、新たに「経箱－2008」として制作、東京と金沢において展示を行った。

「経箱」は、中古の抽選器を改造してセンサを組み込んだ作品で、鑑賞者が回転させることで般若心経を唱える音声が鳴り響く。古ぼけた道具に、新たな機能を「憑衣」させ、それを操作することで新たな感覚を呼び起こそうとするものである。

この作品は、チベット仏教で使用される摩尼車（まにぐるま）をモチーフとしている。摩尼車とは、経文が納められた筒のようなもので、片手で持てるものから寺院に組み込まれた巨大なものまで様々な形態がある。手を使って１回転するごとに経文を１度唱えたことになる。「経を唱える」ということがこれほどまで軽く、容易な行為で代替できてしまうということ。それは布教する側の手厚いサービスとも考えられるが、辛く長い修行を軽く飛び越えてしまう悪く言えば節操の無さ、そこに潔さと心意気を感じてしまうのである。宗教的な行動様式の中に見え隠れする人間の本質、それを作品のテーマに、コンピュータをより親しみやすい形で使用し、制作した。

今回の制作にあたっては、単なる再制作ではなく技術的な更新と内容の変更を行った。

2006年の制作時では抽選器に組み込む無線センサとしてワイヤレスマウスを使用したが、今回の制作では、家庭用ゲーム機「Wii」のリモコンを改造したものを使用した。Wiiリモコンは三軸加速度センサが用いられており、無線によって角度の情報を送信することができる。通信方法としてBluetoothが採用されているので、展示会場の裏側に設置したコンピュータによりデータを受信、回転方向・スピードを割り出し、音声ファイルの再生をコントロールさせる。音声ファイルには般若心経を唱える声が保存されてあり、抽選器の回転スピードに応じて再生スピードが変化するようになっている。

さらに鑑賞・操作法の変更点として、観客が音声を聞き取る方法を電話の受話器に変更した。今現在ではほとんど使われることのなくなった「黒電話」の受話器を改造、コンピュータから送信される音声を無線（FM電波）で受信できるようにした。

もう１つ、機能として追加している点がある。今回、２台の抽選器を使用しているが、それぞれの回転スピードが一致したとき、聞こえる音声が入れ替わるようになっている。

抽選器は丸い形の箱が支柱の上に取り付けられており、取っ手がついている。一目見ただけで、その機能を知らない人でも取っ手をつかんでまわし始めるであろう。黒電話の受話器も、その形状から誰でもまずは耳にあてて音を聞いてみるだろう。現在の携帯電話と比較しても非常に分かりやすい形状になっている。形態が機能を示していることで、多くの人がためらわずに行動を起こせる、ということもこの作品の1つのテーマになっている。現在のコンピュータ、電子機器の操作において、操作の複雑さが初心者の習熟の妨げになっているが、シンプルな操作でより豊かな機能を体感できることが重要になってくるだろうと思われる。

「経箱－2008」は、2008年7月14日～26日「曖昧な領域 ambiguous domain」（ASK? art space kimura 東京）、2008年10月22日～10月29日「美大アートワークス 2008」（金沢市民芸術村）において展示された。

（いとう・ひでたか　共通造形センター／映像メディア）

「経箱－2008」

無線センサの仕組み

金沢市民芸術村での展示の様子